

あっ！と驚く弥三郎

－大野規周の墓－

萩原哲夫（東亜天文学会／伊能忠敬研究会）

伊能忠敬の測量機器（象限儀・垂揺球儀）を製作し、江戸幕府浅草天文台（暦局）に出入りの時計師の大野弥五郎規貞・弥三郎規行の職人親子がいる。「伊能忠敬測量日記」の蝦夷地へ出立の寛政十二年閏四月十九日（1800/6/11）の千住宿送別の人々の中に、神田時計師弥五郎・弥三郎（規行）の名が見える。その三代目が弥三郎規周である。

1. 神戸の長谷川一郎先生から 2006 年 11 月初めにお手紙をいただいた。「江戸時代の時計師で大阪造幣局に勤めた大野規周の墓があることを教えられました。造幣局の北の方です。また造幣局（近くの桜ノ宮）にある記念碑をよく見たいと思います。大野弥三郎の子が規周（1819-1886）。その子が規好ですが、その後に直周（1878-1940）がいて、牧師でプリンストン神学校に留学し、・・・。」この直周と長谷川先生の父上は牧師友達だったのだという。その直周につながる方の御宅から墓地の連絡があったとのこと。

大野規周については、かつて西山峰雄・渡辺文雄・御子柴廣・渡辺誠さん等と長野・松代の真田宝物館蔵の「中星儀」（足立信順作）を閲覧した折に、佐久間象山記念館にあった地平儀に大野規周の銘がありバーニア目盛のあるのを見ていたので、お墓探索人としては久しぶりに興奮したのである。

長谷川先生の指摘のように、弥三郎規行の子が規周で、（伊能忠敬・忠誨をサポートした箱田良助は、後に榎本円兵衛と称し、その次男である）榎本武揚らとオランダへ留学したあと、大阪造幣局に勤め、そこに写真も残され、その子が規好であることまでは知っていた。

という訳で、墓地は地図 1/25000「大阪東北部」の上下中央の左端から約 6.5cm 東側にある南北に長い墓地がそれだという。それが大阪市北霊園であり、**Google Earth**で見ると南北 200m 東西 100m もあり 1 つの墓碑を探すのにはかなり時間が必要な気がした。

2. 長谷川先生との現地調査は 11 月 15 日に行った。大阪市北霊園（北区長柄中 2-4-25）は天神橋筋 6 丁目（天六）の交差点の北東 500m のところにある。長谷川先生の心がけが良かったのか、あっけなく大野規周の墓碑は見つかった。霊園管理事務所の方に聞いて、外に出てみたら。なんと管理事務所の前に出てみるとひと目で判るような、霊園内で一番高い墓碑であった。こんな高い墓碑に私は初めて出会った。もし泉下の規周本人や父の規行がこの墓碑を見たとしたら「あっ！と驚く弥三郎〜。」と唸ったであろうと思われた。

私は墓碑の正確な高さが測れていないことに気づき、翌日また出直してその日陰の長さを測定して、後で計算にて高さを求めた。4.8-4.9m くらいの答えが出たので、昔の「丈六の大仏」のように一丈六尺（4.84m）の高さを採用したのではと想像された。後になって、なぜオベリスク形式の形を採用したのだろうか疑問が湧いてきた。この霊園内には他にもオベリスク型の墓が幾つか存在しているのだ。これについては、伊能忠敬との関連で思い

出したのが東京・芝公園にある伊能忠敬測地遺功表（第二次大戦で供出されたので、現在は戦後新たに建てられた。）はかつて、東京地学協会が明治 22 年建立したものがあってそれは青銅製のオベリスク型をしていたことである。明治 20 年頃は欧化思想？によりオベリスク型の墓碑が流行していたのではと想像している。

3. 現在、Google Earth <http://earth.google.co.jp/> により大阪市北霊園の位置を表示して見ると。経緯度 34° 42'50.61"N, 135° 30'52.76"E の位置に大野規周の墓の日陰が長く投影されているのを見ることができる。

4. その後、2007 年 3 月に佐藤利男さんから大野規周の死亡記事（時事新報）を横浜開港資料館での閲覧で発見されたことを教えていただいた。佐藤さんのこうした史料発掘の手際の見事さにはいつものことであるが感心してしまう。

5. 規周が東京で病死したときの死亡広告は規周の倅の規好が載せているが、その住所、小石川水道町 35 番地（現在の文京区春日 2-22）の“長谷川皎”という人物が気になったので、ネット検索してみた。すると 1 件だけ見つかった。「福井県文書館研究紀要」第 1 号の熊澤恵里子氏の論文、「幕末維新期の福井藩政改革と藩校 ―地方教育史研究の視点から―」の 54 頁の付表 の 9 番目に下記のようにあった。（1 行のみ表示）

表 4 「新番格以下諸下代迄」イハニホヘトにみる藩・県職員

氏名	給禄	年齢・身分	家督後の主な経歴
9 長谷川皎	33.244	小算	明治3年1月 民政寮附属、金館方算者勤、 12月 民政寮勤、 明治4年6月 改正ニ付免職。 10月 惣会所出納方、 12月 金館方、 明治5年1月 金館方廃止、 明治5年7月 第二区勝見下 町組副戸長、 9月 惣会所雇

長谷川皎氏とは、大野規周と福井藩時代の同僚のような人であるか？又は娘婿のような人かもしれない。また、「江戸明治東京重ね地図」というソフトウェアで明治期の地図を表示してみると、そこには松平家の屋敷があったことが判った。それとは別に、藩主・松平春嶽（慶永）の屋敷は小石川にあり、明治 23 年(1890)に小石川の自邸にて享年 64 で死去したという情報（番地は不明）まで見つかったので、そこは藩主が維新後に住いた御屋敷で、その屋敷の一部に長谷川皎の家があったということなのではないか。

6. 大野規周は松平春嶽(慶永)に遣えた後に幕府オランダ留学生となるが、留学先のオランダで撮影された大野規周の写真が文献 1、2 に載っている。肖像写真は文献 3 にも載っていて、こちらには榎本武揚らの写真もある。

大野規好も親の跡を継ぎスイスに留学して明治 10 年(1877) 帰国した後、大阪に時計製造工場を設立し、懐中時計の製造を行ったらしい。

7. 大野規周の系図は、参照した文献 2 にある宮永孝氏の論文『幕府オランダ留学生--職方・大野弥三郎』からのものですがその、この系図には間違いがあり、規周までの最初の部分は、次のようになります。

大野弥五郎〔規貞〕 ――― 弥三郎〔規行〕 ――― 弥三郎〔規周〕 ―――
(没年不明) (弘化二年五月没) (明治十九年十月六日没)

倅・規好のあとの直周(牧師)が長谷川先生の父上の牧師友達である。これ以上は関係者も居られ、個人情報に触れるので詮索は止めます。

8. 松平春嶽(慶永)は懐中時計の愛用者であるらしいことが文久二年の「登京日記」で判る。大野規周を福井藩に雇った理由も彼が優秀な“時計師”であったことによるのであろう。春岳遺稿 は国会図書館・近代デジタルライブラリー <http://kindai.ndl.go.jp/index.html> で参照できる。 [春岳遺稿](#) で検索すると見つかるので、その行をクリックし [第 1 冊] 巻 1, 2 の [附録](#) を選ぶと「登京日記」を表示できる。

おわりに.

大野規周の墓の情報を知らせていただき、現地踏査にも同行いただいた長谷川一郎氏と、大野規周の死亡広告、新聞記事他その他資料をご教示いただいた佐藤利男氏に深く感謝申し上げます。

大野規周の墓碑を見学される方は大阪造幣局博物館やその北 600m のところにある桜宮神社の境内に大野規周君記念之碑(次ページに碑文あり)があるので訪ねると良い。

参考文献：

- 1.宮永孝：幕府オランダ留学生，東京書籍 1982.3
- 2.宮永孝：幕府オランダ留学生--職方・大野弥三郎，『社会労働研究』31 巻(3・4 号) [1985.03]
- 3.小沢健志：幕末 写真の時代，ちくま学芸文庫 [1996.06]
- 4.石田誠太郎：大阪人物誌 臨川書店 1974 (正編は昭和 2 年刊、続編は昭和 11 年刊の複製)

(一三〇)大野規周

規周

大野氏、名は規周、通稱彌三郎、世々徳川幕府の天文臺測量器械師たり、文久二年幕命を以て和蘭に赴き大に器械の製作事業を研究して歸朝す、安政二年越前侯松平春嶽其技の精巧なるを聞き幕府に請ひ聘して我が藩士に器械製作術を教授せしむ、慶應三年幕府更に海軍器械師に任じて俸祿を給す、明治維新の後ち太政官徴して工作部官等司判事に任し、同二年造幣權允に轉じ六年七等出仕に補せらる、同七年自から製作する所の天球地儀を宮内省に獻ず 天皇其精緻巧妙を激賞し給ひ召見して錦段及び描金匣を賜ふ、後ち造幣中監に遷りて從六位に叙せらる、同九年自製の寒溫計器を宮内省に獻し又た自製の權衡を大藏省に獻す何れも賞賜あり、累進造幣中技師となり更に大藏三等技師に任じ勳六等を授けらる、人と爲り敦實溫靖父祖三世技術を攻究して心を器械の製作に盡くして發明する所あり就中規周最も其名を得たり、現時我邦器械工業の旺盛なること實に此人の力に依るもの多しと云ふ、歿後造幣局技監遠藤謹助其功を追想し同僚と謀りて記念碑を城北櫻宮の境内に建つ

・歿年 明治十九年十月五日 行年六十七歳

・碑文 大野規周君紀念之碑銘(大阪市北區櫻宮所建)、大藏三等技師正六位勳六等大野君紀念碑、大藏三等技師正六位勳六等大野君、諱規周、稱彌三郎、大野其氏、世爲舊幕府天文臺測量器械師、文久二年八月、以幕命赴荷蘭、在其器械製造所講習者六裘葛、業就歸朝、安政二年、越前中納言春嶽侯、請求幕府、聘令教授器械製造術于藩士、給以稍食十口、慶應三年、幕府以其技術精熟、更命海軍器械師、賜稍食十口金百餘圓、明治紀元、太政官徴除工作部官等司判事、月賜金百圓、二年九月、任造幣權允、六年、補七等出仕、七年、君獻所自製天球地儀于宮内省 天皇激賞其精緻巧妙、召見賜錦段及描金匣、八年十月、遷造幣中技監、其十一月叙從六位、九年二月、獻自製寒溫計器三于宮内省、賜銀盃三絹二疋、其九月獻自製權衡一于大藏省、賜木盃一、十年一月任造幣少技師、十三年一月、進造幣中技師、十五年六月、更任大藏三等技師、十六年十二月、叙勳六等、君爲人敦實溫靖、父祖三世攻技術、而君尤有巧思、凡天球地儀以至權衡度量寒溫時辰之諸器、皆極其精巧、遂至應 制製黼坐時辰器獻之、是以前後賞賚、指弗暇屈、齒垂七旬精神氣魄不少減少壯時、抑發明機器工其技術者、在維新以後則彬彬輩出、固不乏其人也、顧君則當舊幕府泰西技術未甚開之時、獨先發奮卓勵、能繼父祖箕裘、從事工藝、刻苦勤勉究其蘊奧、以鼓舞後進、誘導弟徒、今日技工製造機器者、率皆出君之提命、其裨益于世用、君首唱之功、豈可得掩乎哉、況君所製造諸器械中、秤量器尤爲精妙、是以先時不得不仰其器械于海外者、今則多用君所製造者、恢々有餘也、其竭力局務、豈可謂不巨乎哉、今歲十九年十月、叙正六位、其五日會罹篤疾竟不起、距生文政三年、享年六十七、君歿後數日、造幣局技監遠藤氏、與其僚屬胥議、釀資勒其行蹟于貞珉、以爲紀念碑、建之府城東櫻宮祠下、索予以銘辭、乃銘曰

曾運郢斧、學技荷蘭、製權造衡、鏤心刻肝、三世工藝、海內弁冠

明治十九年丙戌十一月 平安 菊池純撰文

正五位勳三等遠藤謹助篆額 長門 中村勤書